

## 星の贈りもの

森野 水琴

彼は夜空の星を眺めている。

それぞれの星が誰かの書いた作品だという伝説。

すると、この星々の中に歴代のノーベル文学賞作品もあるのかと見渡すが、悲しいかな見分けられない。

彼が書いた作品は、どこにあるのだろうかと探すうちに、星々が集まって系のようになっているのを見つけた。彼が属する作家グループの作品群なのである。

彼が属する作家グループでは最近、作品に対する投げ銭のようなシステムが導入された。

彼も早速、推し活を始めた。まだまだ趣味程度の推し活である。ちなみに金額にして百万円を超えると、趣味は道楽に昇格する。

彼自身も含めて同じ作家グループからノーベル文学賞を受賞する人が出れば、どんなに晴れがましいことであろう。その想いが彼の背中を押す。

そんな夢ばかり見て、との声に彼は宣伝のようにつぶやく。

男は黙って スターギフト

翌日、彼は友のスターギフト設定作品を発見した。嬉しくて十スターギフト贈った。

さらに五日後、彼がスターギフトを贈った作者全員に、来年のノーベル文学賞を目指し励まし合おうと、五スターギフト贈った。

その一週間後、彼は友の訃報に接した。友と星の贈りもののキャンペーンを彼は個人的に始めた。友の作品にスターギフトを追加するかわりに、彼をフォローしている作家の作品を中心にスターギフトを贈ることにした。

スターギフトは読者が作家に贈るもの

スターギフト獲得ランキングは公表されていないが

トップの作品は本屋大賞ならぬ 読者大賞のようなものである

キャンペーンを始めて半年経過した二〇二五年三月、彼の推し活は趣味から道楽に昇格した。

昇格は時間の問題だったとはいえ、道楽となると一生ものである。

最初の一、二ページを読んで、これはという作品を見つけると、彼は奨励賞に認定し、百スターギフト贈って励ます。

表紙のイラストに心打たれた作品は、イラスト優秀賞に認定し、百スターギフト贈っている。

奨励賞受賞作から大賞を、イラスト優秀賞受賞作からイラスト大賞を随時選んで、五百スターギフト贈っている。ただし一回に贈れるのは百スターギフトが上限なので月に一回、百スターギフトを五か月かけて贈っている。

彼のスターギフトさんまいは続く